

令和6年度 学校評価 総括評価表

徳島県立徳島視覚支援学校

学校経営方針

1 徳島県教育の基本方針

個性と国際性に富み、大きな夢や高い目標をもって、自らの可能性を高め、主体的に未来を切り拓くために果敢に挑戦する力を育む「徳島ならではの」教育により、本県の宝である「人財」の育成を目指します。

2 徳島視覚支援学校の使命

徳島視覚支援学校は徳島聴覚支援学校と同じ校舎内に独立して併置する全国でも類のない学校として、両校が連携・協働し、「幼児児童生徒の夢と希望につながる保育・教育」を行うとともに、県内唯一の視覚障がい教育を担う学校としての役割を果たし、「共生社会の形成につながる特別支援教育」を推進します。

3 めざす学校像

- (1) 幼児児童生徒の人権を尊重し、一人一人を大切にする教育を学校におけるすべての教育活動をととして行う学校
- (2) 視覚障がいや多様な障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援ができる学校
- (3) 視覚障がいの専門性を校内外で発揮できる学校

4 本年度の重点目標

- (1) 幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。
 - ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。
 - ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。
- (2) 幼児児童生徒のライフステージを見据え、個別の教育支援計画等を関係機関と共有するとともに、幼稚部から卒業後につながるキャリア教育を推進します。
- (3) 視覚障がい領域を対象とした特別支援学校として、全校的な体制のもと、本県の視覚障がい教育充実のため、専門性の向上と持続可能なセンタ－的機能の取組を充実します。
- (4) 地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。

重点目標（１）	幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。 ・学校と家庭・寄宿舍の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。					
具体的な活動計画		評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 総合評価 （評定） 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
幼稚園部の目標		動作や発声等、自分なりの方法で、幼児が自分の思いを伝えられるような保育を実践する。				
幼稚園部	・周囲の人とのやりとりの中で、幼児が発信する動作を増やす。	・動作に言葉を添えて幼児に伝え、挨拶ややりとり等の中で幼児が発信する動作を５種類以上増やす。 ・療育機関や訓練機関等を年間３回以上見学し、幼児が発信している動作や言葉についても情報交換等を行い、保育の中に取り入れる。	・「おはよう」や「こんにちは」、「ありがとう」の挨拶やお礼、遊びの中で使う「三輪車」等、５種類以上増やすことができた。 ・幼児が利用している療育機関と訓練機関に４回行き、幼児の様子の見学と、幼児が発信している動作について情報交換を行い、保育中の幼児とのやりとりの中で「〇〇のことだね」と伝え、幼児が「伝わった」を感じられるようにした。また、日々の連絡帳に新しく伝えた動作を記入し、保護者・関係機関との連携を図った。	A		・幼児からの発声や動作が増え、幼児がしたいことや聞きたいこと等の思いを、やりとりの中で伝えられることが多くなった。しかし、動作の意味が相手にすぐに伝わらないこともある。相手に伝わった喜びを味わえるよう、部会等で幼児の動作の意味について周知したり、幼児にも動作をゆっくりするよう伝えたりして、思いを伝えることへの意欲向上を図りたい。
エピソード		挨拶やお礼をするときに、伝える相手の方に顔を向けて伝えることができた。				

重点目標（1）		幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。					
具体的な活動計画		評価指標		評価		学校関係者評価	次年度への課題と 今後の改善方策
				評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 （評定）	学校関係者の意見	
小学部の目標		児童の障がいの特性に応じた教育活動につなげるために、児童の個別学習や集団活動の場、家庭や関係機関との連携において、効果的なICT活用に取り組む。					
小学部	・日々の教育活動及び家庭や関係機関との連携においてICT機器を効果的に活用する。	・児童の実態に応じた授業実践や、家庭や関係機関との連携においてiPad等を効果的に活用する。（学部で年間7ケース以上） ・学部内で各学級の取り組みについての実践例をまとめる。（年間1回）	・授業では、日常生活の指導での活用や進行等の係活動、体調不良時にオンラインで教室で授業を受けたり、授業風景を録画し、教員の授業改善等に活用したりした。家庭には授業や行事の児童の様子を写真・動画で知らせた。また、Teamsを使って、連絡を取り合った。関係機関との連携では、児童の学校での活動の様子や体調の変化の様子を動画に撮り、社会人講師や家庭、医師と共通理解を図り、アドバイスをいただいた。 ・各学級の実践例の取組をまとめ、学部会で共通理解した。（年間1回）	A		・家庭との連携手段としてTeamsの活用が有効であったため、Teamsの使用方法や活用例についてマニュアル化し、他学部にも周知する。また、授業での活用の仕方についても広げながら、児童がより充実した授業が行えるよう努めたい。	
エピソード							

重点目標（１）		幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
中学部の目標		学校や家庭、寄宿舎、関係機関等と連携を図りながら、障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育活動に取り組む。				
中学部	・家庭や寄宿舎、放課後等デイサービス等の関係機関と、生徒の実態や課題、支援方法等について細かく情報交換、共有を行い、得られた情報を元に、目標設定や教育活動を行う。	・寄宿舎指導員と、生徒の様子や課題について週2回以上情報交換や共有を行う。必要に応じてTeamsを活用する。 ・学習の様子、新しい教材、支援方法の変更点、コンサルテーションの指導助言内容を記録する。必要に応じてタブレット端末やその他ICT機器を活用する。懇談や長期休業を活用し、保護者と情報を共有することで、家庭や放課後等デイサービス等関係機関との連携につなげる。 ・個別の指導計画「日常生活の指導」「自立活動(食事に関する指導)」「自立活動(歩く・身体)」の各目標に対する評価「◎」「○」が80%以上である。	・生徒の体調等について、寄宿舎指導員と週2回以上情報共有を行った。寄宿舎での目標や支援内容、生活の流れについても同様に、情報交換することができた。 ・放課後等デイサービス(以下デイ)の職員に教室環境や授業を見学してもらい、学校やデイでの様子を情報交換した。 ・得られた情報を元に、授業の目標を設定し、各目標に対して◎や○の評価が80%を越えた。 ・コンサルテーションの指導助言を踏まえて、保護者と今後の方向性について共通理解を図ることができた。	A		・Teamsの活用については、利点(やりとりが字で残る、いつでもすぐに入力できる)と課題(iPadの確認頻度を増やす必要がある)の両方が明確になった。Teams、直接のやりとり、メモでのやりとり等それぞれの利点と課題を整理し、場面や連絡事項に応じた方法を取捨選択していきたい。 ・これまで積み重ねてきた学習と卒業後を見据えた取り組み、両方のバランスを取りながら目標設定や教育活動をしていきたい。
エピソード		教員がデイへの引き渡し時にデイでの様子を聞いたり、デイの職員が学校での支援方法を聞いたりする等の情報交換もできた。 学期末、学期始めの懇談に、可能な限り寄宿舎指導員が同席し、保護者とともに、家庭・学校・寄宿舎での生徒の様子を共有することができた。				

重点目標（１）	幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価	次年度への課題と 今後の改善方策
		総合評価 （評定）		学校関係者の意見	
高等部普通科 の目標	学校と家庭・寄宿舎・関係諸機関との連携を深め、生徒の学習や卒業後の生活に活かす。				
高等部普通科	・生徒一人一人に応じた学習環境を整えたり、家庭等と連携したりしながら、生徒の生活を支援する。	・UDブラウザの様々な機能を知り、自学自習に利用できるように長期休業にUDブラウザを利用する課題を課す。（普1：3回以上/年） ・生徒が活用できるアプリケーションを増やし、家庭でも保護者と一緒に楽しめるようにする。（A組：2種類以上/学期） ・アプリケーションを共有し、生徒の学校での様子を寄宿舎と共有する。（B組：毎日） ・移行支援会議等で、生徒の様子を動画等で見てもらいスムーズな移行に繋げる。（C組）	・UDブラウザの拡大縮小・検索・アンダーライン・しおりなど、基本的な機能を使うことができた。（普1：3回/年） ・Keynoteに生徒が好きな動画や生徒の写真を使って作成したスライド等を入れ、家庭に持ち帰った際に保護者と一緒に見たり聴いたりできるようにした。たいこあそび、ゆびつむぎ、だれでもピアノ、タッチカード等のアプリを家庭でも使用して楽しめるようにした。（A組：2種類/学期） ・生徒が寄宿舎に泊まり帰宅しない曜日にiPadアプリ（Teams）を使って連絡帳の写真を送り、生徒の様子や連絡事項を保護者や寄宿舎と共有した。（B組） ・移行支援会議に向け、学校生活や授業の様子を動画撮影した。（C組）	A	・家庭の状況や課題によっては、日常的に家庭で取り組んでいただくことが難しいものもあった。週末等にタブレット端末を持ち帰った際に、短時間でも生徒と保護者、生徒本人が取り組めるような内容を検討し、習慣化できるようにする。
エピソード					

重点目標（１）	幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 （評定）	学校関係者の意見		
高等部職業学科の目標	生徒一人一人のあん摩・マッサージ・指圧、はり、きゅう施術の技術力、臨床能力向上を図る。					
高等部職業学科	・生徒の臨床能力向上に向けて、生徒一人一人の個別課題に対し、問診や施術の場面でICT機器を活用して振り返りに利用するなど、関連する授業の担当教員間で情報を共有し、連携した指導を行う。	・各授業（基礎実習や臨床実習）でみられた課題を、授業後に次時の授業担当者と共有し、次時の授業の目標を設定する。また、録画・録音した内容を基に課題や指導方針について学科内で週1回検討を行う。	・臨床実習ではパソコンやリンクポケットを利用して実習後のカルテ指導や振り返りに利用するなど、各授業後に生徒の課題を担当教員間で共有すると共に、週1回の学科会で指導方針を検討することにより、生徒個々の目標に向けて、教員間で一貫した指導を行うことができた。	A		・生徒は自らの目標に向けて意欲的に取り組んでいる。引き続き、生徒それぞれの目標に向けて一貫した指導・支援ができるように教員間で連携していく。
エピソード	・本年度は校外臨床実習としてあん摩体験会を八万町民体育祭、交流プラザフェスタ、県庁、総合教育センターで行った。2年生は全ての会場で施術を、1年生は2箇所での実習に参加し、受付や施術の見学を行った。2年生は日頃の練習の成果を発揮し、体験された方々から「気持ちよかった。」「また来てほしい」等の喜びの声をいただいた。1年生は見学を通して、2年次に行う実習をイメージするとともに、自分の施術を振り返ることができた。生徒たちは実習から校内では得られないいろいろな刺激を受け、気持ちを新たに日々の臨床実習や基礎実習に取り組んでいる。					

重点目標（１）	幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場で利活用します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と 今後の改善方策	
		評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 （評定）	学校関係者の意見		
寄宿舎の目標	学校、家庭と協働し、舎生一人一人の社会参加や自立をめざした生活指導・支援に取り組む。					
寄 宿 舎	・家庭や学校等と連携し、卒業後を見据え、舎生一人一人の実態や教育的ニーズに応じた生活指導・支援の充実を図る。	・学校ケース会議や、保護者面談等に指導員が年間のべ11回以上参加したり、必要に応じてTeamsを活用したりして、舎生の様子や課題、個別の指導目標等について情報を共有することで、舎生の実態や課題等を把握する。 ・寄宿舎における個別の指導目標について、指導員間で年間3回以上検討し、指導内容の共通理解を図り、統一した支援を行う。	・学校のケース会や保護者面談に、寄宿舎指導員が、年間のべ8回参加した。勤務等の都合で参加できなかった場合は、資料等で情報共有を行い、舎生の実態や課題等の把握に努めた。また、必要に応じてTeamsを活用し、学級担任や保護者と情報共有を図った。 ・寄宿舎における個別の指導目標について、指導員間で年間9回以上検討することで、指導内容の共通理解を図り、統一した支援を行った。	B		・保護者面談に参加するだけでなく、Teamsやメモ等を利用して学級担任と連携する。保護者とは、送迎時や荷物の受け渡し時に積極的にコミュニケーションをとり、実態把握や体調管理に生かす。 ・専攻科の成人舎生と、学期に1回程度寄宿舎面談の機会を設け、舎生一人一人の実態や、ニーズを把握し、学習環境の整備や支援に生かす。 ・専攻科舎生の要望があった時には、成人舎生同士で交流できる場所を準備する。
	・舎生の実態や教育的ニーズを踏まえた教育活動の充実のため、指導員の専門性の向上に努める。	・聴覚支援学校指導員を対象とした、点字ミニ研修を年間6回以上実施する。 ・手話ミニ研修に週3回以上参加する。 ・校内や外部の関係機関等から講師を招き、聴覚支援学校指導員と合同で、60分程度の寄宿舎研修を年間2回以上実施する。	・視覚指導員が講師となり、点字ミニ研修を年間6回実施した。 ・手話やe-ラーニング等のミニ研修に週4回程度参加した。 ・外部講師を招いたり、国立特別支援教育総合研究所学びラボの動画を活用したりして、合同研修を年間2回実施し、救命救急や盲ろう児への関わり等について学んだ。また、相互交流月間を設けたり、見え方体験キットを活用したりして、舎生の聞こえや見え方等への理解を深めた。	A		
エピソード						

重点目標（４）		地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
課の目標		・視覚障がい教育の理解・啓発のため、教務課関連の情報の発信に努める。				
教務課	・本校の行事や学習内容など、活動をより多くの方に知ってもらえるよう、広報活動を充実させる。	・教務課関連のホームページを更新する。（学期5回以上） ・オープンスクールの案内について、ホームページに加え、新たに広報手段を見つけ、発信する。（2件以上）	・各学期始業式・終業式等式典に加え、1学期には、入学式や各学部教育課程等、2学期には、介護等体験やオープンスクール等、3学期には入試関連等、それぞれ案内や活動の写真などを掲載し、各学期5回以上ホームページを更新することができた。今後、卒業式及び修了式についても紹介予定である。 ・オープンスクールの案内について、新たに2件以上、広報することはできなかったが、ホームページに加え、正門前の掲示板に掲示し、広報することはできた。	B		・オープンスクールの来校者は、昨年度と変わらない状況であった。より多くの方が来校し、本校の活動を知ってもらえるよう、他課と協働し、情報を発信していきたい。
エピソード						

重点目標（４）		地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
課の目標		聴覚支援学校と地域の関係諸機関と連携し、研修や行事等を行うことで、両校や地域とのつながりを深めると共に、本校に対する理解の推進を図る。				
渉外・安全課	・両校の幼児児童生徒の実状に即した合同研修や行事の計画、実施を通し、本校に対する理解を深める。	・両校、地域の関係諸機関との研修や行事を年3回実施する。 ・両校の各担当者、地域の関係諸機関（日本赤十字の指導員や八万地区の自主防災の方等）との話し合いや情報交換の機会を年3回以上持つ。	・聴覚支援学校や関係諸機関とともに、両校に即した内容の火災避難訓練、地震津波浸水避難訓練、AED研修、不審者対応訓練等、3回以上の行事や研修を実施できた。 ・各研修や行事が両校の幼児児童生徒の実状に即した内容になっているか、両校や地域とのつながりを深めるものになっているかに重点を置いた話し合いの機会を多く持つことができた。	A		・「学校と地域との共助」という観点からも、障がい児・者への理解を深めていただけるように、今後も合同防災学習を継続し、交流を深めていきたい。
エピソード		・合同防災学習では、消防署や八万地区への協力依頼や連絡等は八万地区自主防災組織の方が中心になり、対応して下さった。また、テントの立て方や簡易トイレの使い方などを教員や幼児児童生徒に教えていただいた。				

重点目標（４）		地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
課の目標		地域社会・関係者が参加した学校行事や他校との交流及び共同学習を推進し、視覚障がい教育への理解・啓発に努める。				
生徒活動課	・地域社会・関係者が参加する行事を計画したり、他校との交流及び共同学習の機会を昨年度より増やしたりする。	・地域社会・卒業生・同窓会等関係者に開かれた文化祭を実施する。 ・薬物乱用防止教室や携帯スマホ安全教室等において、聴覚支援学校と共同学習を年2回以上実施したり、両校の文化祭に参加し交流したりする。	・地域の学校関係者や卒業生、同窓会等に公開し、創立130周年記念文化祭を実施した。 ・幼稚部と小学部はそれぞれに、聴覚支援学校の幼児児童とごっこ遊びをしたり、ゲームをしたりなどして交流を深めることができた。 ・高等部普通科の生徒が聴覚支援学校文化祭に参加し、表現の部を鑑賞したり、即売を行ったりして交流した。また、薬物乱用防止教室やスマホ携帯安全教室を実施し、共に学習した。	A		・5年ぶりに文化祭を公開し、実施することができた。来年度は地域の方や関係機関の方に声かけし、公開したい。また、交流及び共同学習においては、内容を工夫し、他校の幼児・児童・生徒と触れ合う機会を増やし、視覚教育の理解・啓発をさらに努めたい。
エピソード						

重点目標（１）		幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
課の目標		新転任の教職員を対象とした視覚障がい教育の基礎基本等を学ぶ研修を実施する。				
研究・情報課	・新転任の教職員を対象に、視覚障がい教育を実践するために必要な見え方や眼疾患の理解、全盲・弱視での指導、支援の基本等、視覚障がい教育の基礎基本を学ぶ機会を年間通して計画・実施する。 ・新転任の教職員以外も希望者が受講できるように案内する。	・新転任者研修を4月に6回実施する。 ・個別の教育支援計画の研修を4月に実施する。 ・視覚障がい教育研修を年間13回実施する。 ・新転任者以外の受講希望者の取りまとめを行う。	・新転任者研修を4月1日から8日の期間に6回実施した。 ・個別の教育支援計画の研修を4月10日に実施した。 ・視覚障がい教育研修を令和7年1月末までに13回実施し、職員朝礼掲示板を活用して参加希望者の取りまとめを行った。 ・参加者からは、研修の中で指導・支援に関する多くの気づきがあったという感想があった一方、受講者の経験年数等に応じて柔軟に受講を選択できる仕組み等、受講者の負担感軽減の要望があった。	A		・5年ぶりに文化祭を公開し、実施することができた。来年度も同様に公開したい。また、交流及び共同学習においては、内容を工夫し、他校の幼児・児童・生徒と触れ合う機会を増やし、視覚教育の理解・啓発をさらに努めたい。
エピソード						

重点目標（１）		幼児児童生徒一人一人の障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、より質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
課の目標		幼児児童生徒の発達段階に応じた人権教育の充実を図る。				
人権・キャリア教育課	・人権教育年間計画において、生命(いのち)の安全教育に関する個別的な視点「子ども」「犯罪被害者等」の両方もしくはいずれかを計画に明記することができる(80%以上)。	・年間計画の作成時に資料を提示し広報をは図り、全てのクラスおよびHRの計画で1項目の記載がある。	・人権教育年間計画作成時において、生命(いのち)の安全教育に関する個別的な視点「子ども」もしくは「犯罪被害者等」を全てのクラスおよびHRで100%明記することができた。	A		・学校教育において生命(いのち)の安全教育は、重きに置かれているものであるのでも来年度以降も引き続き広報し、本校でもその充実を図りたい。
エピソード	命(いのち)の安全教育の安全教育に関する視点を、パンフレットなどで教員に広報をした。それぞれのクラス、HRで、自己表現や自己肯定感、コミュニケーション、共生などを、学習に位置づけ実施した。					
重点目標（２）		幼児児童生徒のライフステージを見据え、個別の教育支援計画等を関係機関と共有するとともに、幼稚部から卒業後につながるキャリア教育を推進します。				
具体的な活動計画		評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
			評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価（評定）	学校関係者の意見	
課の目標		幼児児童生徒のライフステージや発達段階、適正に応じたキャリア教育及び進路指導の充実を図る。				
人権・キャリア	・幼稚部から高等部の幼児児童生徒の社会的、職業的自立に向け、キャリア教育全体計画をもとに、それぞれの学部学科で実践する。	・幼稚部・小学部は、個別ファイルを活用して家庭の協力を得て、「レッツ！チャレンジ」として家庭で実施できそうな活動の提案を行い、各家庭での実施率80%以上を得る。 ・中学部は、進路希望調査の実施と併せて、職場見学を行う。	・幼稚部・小学部では、家庭の協力を得て、個別の課題やお手伝いを設定し、長期休業などに取り組んだ。幼稚部・小学部の実施率は75%だった。 ・進路希望調査を基に、1カ所施設見学を実施した。住まいの場からの距離等も考慮し、希望に応じた見学先を紹介した。	B		・「レッツチャレンジ」は、内容のステップアップや、学校で学習した課題を家庭でもできるようになった姿が見られた。より個々に応じた課題を設定できるようにしていきたい。 ・施設体験や見学は、引き続き保護者や施設と連携し、個々のニーズに応じて行っていきたい。 ・施設見学を、個々の進路希望に基づき行っていきたい。

教育課		<p>・普通科は、就業体験や学習活動の振り返りを行い、就業体験報告会の実施、キャリアパスポートの作成をする。</p> <p>・職業学科は、生徒のキャリア評価を行い、年2回の評価で合計の評価点数が上がった生徒が全体の80%になる。</p>	<p>・就業体験のまとめ、キャリアパスポートを作成した。就業体験報告会、キャリアパスポート報告会をそれぞれ3学期に実施予定。</p> <p>職業学科は、生徒のキャリア評価を行い、年2回の評価で、合計の評価点数が上がった生徒が全体の100%だった。</p>			
エピソード	<p>今年度は、「チャレンジウィーク」をブラッシュアップし、「レッツチャレンジ」として行った。実施期間や回数に幅を持たせる、過去の実施内容などを例として紹介するなどし、より個々に応じた課題を設定することができたと思われる。昨年度からのステップアップをしたり、学校で行っている課題を家庭でも取り組んだりして実施した。保護者の方からは、「ありがとう」、「上手にできた」などの言葉があった。自己評価した生徒からは、「お風呂を洗って洗剤がかゆかった」などの感想があった。</p>					

重点目標（3）	視覚障がい領域を対象とした特別支援学校として、全校的な体制のもと、本県の視覚障がい教育充実のため、専門性の向上と持続可能なセンター的機能の取組を充実します。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 （評定）	学校関係者の意見	
課の目標	本校のセンター的機能を充実させるため、教員の視覚障がい教育や教育相談に関する専門性を向上させる。				
サポート課	・全校研修や自主研修を実施し、教育相談担当者やそれ以外の教員の視覚障がい教育や教育相談に必要な専門性を向上させ、継承していく。	・全校研修を年間2回以上、自主研修を年間2回以上実施する。 ・実施前後のアンケートを実施することで、研修内容を充実させたり研修参加者の教育相談に対する当事者意識を高めたりする。	・全校研修として「本校のセンター的機能について」「視覚認知面で困難さを抱える子どもたちを支援するために～徳島大学病院眼科『視覚認知外来』における取組み～」の研修を実施した。本校のセンター的機能の実情を共有するとともに、そこで求められている専門性の一部について専門家から研修を受けることができた。また、自主研修会として「見えない状態での食事体験とその支援」「視知覚発達検査について」の研修を実施した。視覚障がい児・者が抱える困難さやそれに対する支援方法を考えたり、検査の演習をしたりすることで、教育相談における当事者意識を高めることにつながった。	A	・センター的機能を担うことができる人員を増やしていくことが急務である。次年度も、視覚障がい教育や教育相談に関する知識をさらに深めるとともに、演習や実際の教育相談への参加を通して、専門性を継承していく。
エピソード	・「見えない状態での食事体験とその支援について」の研修では、アイマスクをつけた状態で昼食を摂ることで、当事者の感じ方やよりよい支援方法を考える機会となった。 ・「視知覚発達検査について」の研修では、複数の検査の概要をおさえ、使用頻度の多い2つの検査について演習を行った。研修後、架空の対象者を想定して検査を実施したり集計をしたりした。また、その後の支援案について考える機会にもなった。				